

「WHO・健康都市連合国際大会開催記念」

市川市芸術祭・第338回市響

ファミリー交響楽コンサート



指揮：十束尚宏



チェロ独奏：向山佳絵子

ラフマニノフ／交響曲第3番

チャイコフスキー／ロココの主題による変奏曲

ムソルグスキー／組曲「展覧会の絵」（ラヴェル編）

管弦楽：市川交響楽団

2008

平成20年12月14日(日)

午後2時開演

市川市文化会館大ホール

主催：市川市 市川交響楽団協会

後援：千葉交響楽団協会

協力：ヤマザキ製パン(株) (株)全日警

●市響ホームページ

<http://www33.ocn.ne.jp/~ichikyo>

本日のプログラム

ラフマニノフ／交響曲第3番

第1楽章 *Lento - Allegro moderato - Allegro* (約15分)

第2楽章 *Adagio ma non troppo - Allegro vivace* (約12分)

第3楽章 *Allegro - Allegro vivace - Allegro (Tempo primo) - Allegretto - Allegro vivace*. (約12分)

チャイコフスキー／ロココの主題による変奏曲 チェロ独奏：向山佳絵子

ムソルグスキー／組曲「展覧会の絵」(ラヴェル編)

プロムナード ①小人 プロムナード ②古い城 プロムナード ③テュイルリーの庭 ④ビドロ

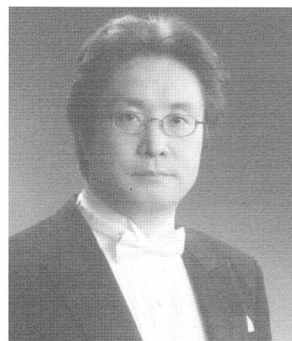
プロムナード ⑤卵の殻をつけた雛たちの踊り ⑥サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ

⑦リモージュの市場 ⑧カタコンブ ⑨鶏の足の上に建つ小屋 ⑩キエフの大きな門

指揮

十束 尚宏 (とつか・なおひろ)

1960年東京生まれ。桐朋学園大学指揮科に入学し故森正、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。卒業後、同大学研究科で更に1年研鑽を積む。在学中の1982年「第17回民音指揮者コンクール」第1位入賞。翌年、入賞記念コンサートを各地で行った。同年7～8月、タングルウッド音楽祭にフェローシップ・コンダクターとして招かれターセヴィツキー指揮大賞を受賞。1984年、ボストン交響楽団に副指揮者として招かれ研鑽を積み、新日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会でデビュー。5月よりベルリンに留学、その間、再びタングルウッドに招かれ、バーンスタイン、プレヴィン、スラットキン等の各氏に師事。1989年4月、NHK交響楽団定期演奏会を指揮し大きな注目を集め、その後も度々協演し、他の日本の主要オーケストラにも多く招かれた。海外では、ストックホルム・フィル、ゾーリンゲン、ニュルンベルクの各歌劇場管弦楽団、リスボン・グルベンキアン管弦楽団等に客演し好評を博した。また、1997年フランス「ノルマンディーの10月」音楽祭に広島交響楽団と共に招かれルーアン、ルアーヴルで演奏。1988年群馬交響楽団の指揮者に就任、翌年から1992年まで正指揮者。1992年から97年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団常任指揮者。1994年から98年広島交響楽団音楽監督。2002年秋より(財)ローム・ミュージック・ファンデーションから奨学金を得て(音楽特別在外研究生)、ウィーン国立歌劇場で研鑽を積み、現在も同劇場にて研修生として研鑽を積んでいる。2005/2006年のシーズンにはフランス国立モンペリエ管弦楽団、2006/2007年にはフランス国立リル管弦楽団、ヘッセン州立劇場管弦楽団(ヴィースバーデン)に客演、また2007/2008年にはコーミッシェ・オパー・ベルリン、ブリュッセル・モネ劇場管弦楽団に客演。



チェロ独奏

向山佳絵子 (むこうやま・かえこ)

東京生まれ。松波恵子、堀江泰氏、レーヌ・フラショー、毛利伯郎の各氏に師事。1985年、第54回日本音楽コンクール第1位入賞。東京芸術大学を経て90年、ドイツ・リュベック国立音楽大学に留学し、ダヴィド・ゲリンガスに師事。同年、第10回ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール第1位入賞。88年、第3回アリオ賞審査委員奨励賞受賞。92年、第2回出光音楽賞受賞。

カザルスホールでの「向山佳絵子とチェロの世界」シリーズや、東京オペラシティでの連続リサイタル、各地の音楽祭への参加、JTアートホール室内楽シリーズのプランナー、ハレー・ストリング・カルテットの一員などとして活躍し、常に話題を集めている。

また、世界の一流演奏家との共演も数多くこなす一方、NHK交響楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、大阪フィル、水戸室内管など数多くのオーケストラとも共演している他、リサイタル、室内楽にと多彩な演奏活動を繰り広げている。98年にはNHK-FMの人気番組「おしゃべりクラシック」のパーソナリティをつとめ、広い層からの支持を得た。その後もNHK-FMには度々出演、特番の司会や、生放送でリスナーのリクエストに応える等特に話題となった。最近では企画の公演が、BSクラシック倶楽部等テレビでも放送されている。

録音はソニーより「バッハ無伴奏チェロ組曲全曲」ほか5枚のCDが発売されており、収録曲はNHKスペシャルやドラマのテーマ曲、TVCM曲などに使用されている。そのほか、カメラータ・トウキョウから池辺晋一郎のチェロ協奏曲のCDも発売されている。

2006年まで東京芸術大学非常勤講師を務め、現在は武蔵野音楽大学非常勤講師として後進の指導を務める傍ら、日本を代表する実力派チェリストとして今後の活躍が大いに期待されている。



管弦楽

市川交響楽団 (いちかわこうきょうがくだん)

平成18年に創立55周年を迎えたアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。

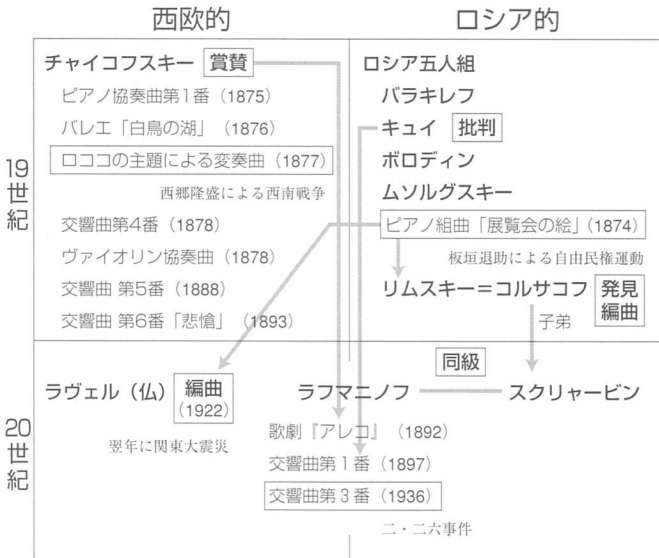
メンバーは現在100余名で年齢構成は20代から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。また、著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。

市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として「クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう」をモットーに常に積極的な活動を展開している。

本日は
ロシアの名曲を3曲お聴きいただきます。
それぞれがロシア情緒たっぷりのメロディがいっぱいです。
どうぞお楽しみください。

ロシア音楽の発展

19世紀後半
民族主義的音楽を目指した作曲家集団「ロシア五人組」と
当時しばしば西ヨーロッパ音楽の模倣に過ぎないと非難されていた
チャイコフスキーの両輪により大きく発展したと言われています。
その「ロシア五人組」なかでも
ムソルグスキーは反西ヨーロッパを強く打ち出していました。
ラフマニノフは
チャイコフスキーが教えていたモスクワ音楽院の
首席卒業生ということもあり
しばしばチャイコフスキーの流れを汲んだ作曲家と言われますが
ロシア正教の音楽を取り入れたり
一般的に西ヨーロッパの一般的な作曲技法から離れたりと
今聞くと、
どちらかという「五人組」に近い存在のように思える作曲家です。



ラフマニノフ／交響曲第3番

作曲家のイメージとしては意外なのですが
ラフマニノフの人生はエリートコースまっしぐらでした。
生まれていたときはすでに没落していましたが
裕福だった貴族の家系の出身です。

音楽の手ほどきを母から受け
12歳でモスクワ音楽院に入学

18歳でピアノ科を卒業
そのときの同級生スクリャービンと首席を分け合いました
その年に作曲家としてピアノ協奏曲第1番を作曲し
翌年には同院作曲科を卒業。
17日間で歌劇『アレコ』を書き上げチャイコフスキーの目にとり
上演されるまでいたりしました。

しかしその後で書いた交響曲第1番は
「ロシア五人組」の一人キュイに酷評されました。

ラフマニノフの作品でもっとも有名と誰もが認めるのは
ピアノ協奏曲第2番ですが
この曲の成立にはあるエピソードがあります。
ラフマニノフは精神科のカウンセリングを受け
「あなたは素晴らしいピアノ協奏曲を作る」
という暗示療法により作曲し
それ以降作曲家としての大きな自信を得たというものです。

しかし
ロシア革命を逃れて
1918年にアメリカに移住したラフマニノフは
生活のためピアニストの活動に忙しく
その後完成された作品はわずか6曲でした。
本日お届けする**交響曲第3番**はその中の1曲で
管弦楽のための曲としては
「パガニーニの主題による狂詩曲」に次いで
スイスはルツェルン湖畔の別荘で作曲され
ストコフスキーとフィラデルフィア管弦楽団により初演されました。
またラフマニノフ自身も指揮した録音を残しています。

祖国を思う感情を強く表現したかのように
本来のラフマニノフの特徴ともいえる
甘く切ないメロディを歌い上げる部分と
アメリカの影響なのか
亡命以降の特徴とも言える
リズムカルな部分を見事にマッチさせた名曲です。

サン＝サーンスの交響曲にみられるような
フランス風の3楽章形式でできています。

静かなイントロを持つ**第1楽章**が始まると
すぐヴァイオリンによって奏でられる第1テーマと
続いてチェロによる第2テーマであなたはきっと
ラフマニノフの甘美なサウンドに夢中になるはずです。

第2楽章はA-B-Aの三部形式
Aの部分は幻想的な雰囲気

中間部のBはリズムカルな音楽です。

フィナーレ**第3楽章**は

これもラフマニノフらしい軍隊風の始まりとエキゾチックな部分でできています。

チャイコフスキー／ロココの主題による変奏曲

皆さんおなじみのチャイコフスキーは
独奏楽器とオーケストラのための曲の初演には
あまり恵まれなかった作曲家のようです。

有名なピアノ協奏曲第1番や

ヴァイオリン協奏曲は

初演を頼んだ名奏者のそれぞれに演奏不可能と拒絶され

代わりの人に頼んだ初演の評判も芳しいものではなく

ヴァイオリン協奏曲に至っては

評論家には「悪臭を放つ音楽」とさえ言われてしまいました。

しかし両方の曲ともすぐに再評価され

演奏不可能といった人も積極的に演奏するようになったといわれます。

本日お届けする「ロココの主題による変奏曲」は

チェロの独奏による曲ですが

初演でソロを担当したチェロ奏者フィッツェンハーゲン

チャイコフスキーに断りもなく

勝手に曲順を入れ替えたり、カットしたりして

そのことにチャイコフスキーは不満だったようです。

現在でもこのフィッツェンハーゲン版で演奏されるのが通例で、

本日もこの版で演奏いたします。

「ロココ」とは

18世紀、ルイ15世のフランス宮廷から流行した様式で

建築史的には

荘厳で男性的なバロックと

優美かつ繊細で女性的曲線の特徴とするロココが

ほぼ同時代の様式で、しばしば対比して使われました。

バロックとは「ゆがんだ真珠」を意味し

ロココとは「洞窟などの岩」（英語のrock）を意味するそうです。

音楽史的には、

その時代の

華麗なるフランス宮廷の作曲家クーブランやラモー

バッハ・ヘンデルと同年で鍵盤音楽の天才イタリアのスカラッティ

オーストリア生まれの天才モーツァルトが有名で

装飾音符の飾りが特徴の

きらびやかで軽やかでエレガントなメロディを特徴としています。

チャイコフスキーはモーツァルトの大ファンで

「モーツァルティアーナ」という組曲を書いています。

曲は

チャイコフスキー自身の作による主題と

その主題を元に

リズムやメロディなどを変化させた7つの変奏曲により

できています。

向山さんの奏でるチェロのサウンドと華麗なるテクニックで、

チェロの魅力をご堪能ください。

ムソルグスキー／組曲「展覧会の絵」（ラヴェル編）

1873年8月

画家で建築家のハルトマンが亡くなり

友人であったムソルグスキーはとても悲しみました。

翌年彼の遺作展が開催され

ムソルグスキーはそこで見た絵のイメージを元に

ピアノ組曲を書きました。

それがこの「展覧会の絵」です。

当時のロシアでは、作曲家はまだ職業として確立されておらず

「ロシア五人組」のほとんどが他に本業を持ち

ムソルグスキーも公務員として働いていたので

曲を仕上げるのが遅く、多くの曲が未完ですが

この「展覧会の絵」はわずか2〜3週間で作曲されたそうです。

しかし、このピアノ組曲は

ムソルグスキーの生前に一度も演奏されることはなく

7年後ムソルグスキーは

アルコール中毒と生活苦から死んでしまいます。

その楽譜を発見したのが

同じ「五人組」の一人、リムスキー＝コルサコフでした。

リムスキー＝コルサコフはいち早くこの曲の素晴らしさに気づき

自らオーケストラにも編曲しました。

プログラムノートのはじめに書きましたように

「ロシア五人組」の中でもムソルグスキーは

最もロシアの民族性を強く意識した作曲家です。

そんなムソルグスキーの曲が再び脚光を浴びるのは

アメリカはボストン交響楽団の依頼で

こともあろうかヨーロッパ音楽の典型ともいえる

フランスの作曲家ラヴェルに編曲されてからでした。

このラヴェル編曲版の出現以降

この曲は大ヒットし

多くのアーティストたちが

さまざまなインスピレーションを得て

多様な編曲をしています。

オーケストラ編曲版では他に

ストコフスキーによるものが有名で

ラヴェル版が色彩的なのに対し

よりロシア風なサウンドに仕上げられています。

また

私と同世代以上の方でしたら。

イギリスのプロGRESSIVE・ROCKバンド

エマーソン・レイク・アンド・パーマー (ELP) による

ライヴLPは、忘れられないでしょう。

今聞いても完成度が高く斬新です。

このレコードのアンコールは

「ナットクラッカー (くるみ割り人形)」をもじった

「ナットロッカー」でしたね。

そして

私の好きな一つは手塚治虫氏の実験アニメーションです。

「展覧会の絵」のオリジナルを尊重するだけでなく

現代社会の問題をするどく訴えかけています。

他に「展覧会の絵」の編曲には多くのものが存在し

ギターソロや古楽器によるもの

最近ではファゴット9重奏によるものなどもCD化されています。

曲は10枚の絵を音楽にしています。

そしてそれらの曲の間を『プロムナード』という

短い曲でつながられています。

これは絵を見て歩く、ムソルグスキー自身だと言われています。

詳細は左上の「本日のプログラム」をご覧ください。

現在はそれぞれの絵がどのようなものかわかっているようで

インターネットで調べることもできますが

今日は曲を聴きながら、どんな絵なのか想像してみるのも

楽しい聞き方だと思います。

本日の出演者

【コンサートマスター】

立田祥子

【第1ヴァイオリン】

安藤 摂津子

石本 恵理

井田 ひとみ

上田 佳津子

大橋 一郎

亀井 玲子

鴨宮 史門

鈴木 薫

秦 一宜

松岡 寛親

望月 聖仁

吉岡 一郎

【第2ヴァイオリン】

石崎 俊信

伊藤 枝里子

上垣 晴美

大村 光子

鎌田 真貴

富田 八江子

永田 匡

仁井 理絵

久田 しげ子

溝田 範子

村上 葉子

【ヴィオラ】

内田 綾美

大橋 かおる

鈴木 亜矢子

高野 重樹

奈良林 弘子

原口 博司

若林 繁

【チェロ】

大塚 啓子

倉澤 倫子

小松 高明

中村 公一

野中 能久

日澤 優

福原 耕二

【コントラバス】

荒木 夏奈

池田 和正

上村 啓介

小林 真弓

花井 さと実

村上 信乃

安永 裕

【フルート・ピッコロ】

大坂 かおり

木村 眞論紀

佐藤 洋行

篠原 梨恵

【オーボエ・

コールアングレ】

太田 悦子

二村 直子

本間 広樹

【クラリネット・

バスクラリネット】

井垣 貴嗣

一瀬 直美

時田 雄

半藤 嗣人

松村 由美子

八木 良子

【ファゴット・

コントラファゴット】

伊吹 直子

遠藤 由紀子

金坂 哲

菅原 斉

【アルトサクソフォン】

宮崎 裕二

【ホルン】

近藤 利昭

潮見 恵子

嶋村 恒夫

林田 朋子

藤井 茂司

山内 正晴

【トランペット】

安藤 宣明

田崎 真二

日高 憲男

【トロンボーン】

新井 恵美

坂田 圭

佐野 義人

【ユーホニウム】

佐野 義人

【チューバ】

松田 精一

【打楽器】

大澤 加奈

都筑 裕

時田 裕

春田 美穂子

松村 奈良子

和田 英恵

【チェレスタ】

竹之内 純子

【ハープ】

小橋 ちひろ